



最果ての

一匹狼

第8回

北海道を4発の台風が襲ったその年に……

手厚い日本の農業政策に取り残された道東の山の中で、2016年、来るはずのない台風4発で作物は全滅。私は1年間、地獄の底をはいずり回っていた。

収入を支えるほどの共済制度はない。組織との取引がゼロなので組勘も使えない。ある電力会社には電気料金の支払いが滞り、「秋までなんとか電気を止めないでくれ！」と土下座したが、農産物保冷庫の電力も止められ、さらなる巨額のマイナスが発生した。ちなみに、「止められるものなら、止めてみる！」と言ったら、本当に止められた。

こうした状況になると、1日中、打開策を考えて頭が真っ白なので



(株)上原農場
代表取締役・四代目
上原 安浩

1964年生まれ。初代が1915年に北海道中標津町へ入植。現在、ソバを240ha、種イモを10ha、生食用馬鈴薯を10ha生産。農産物保冷庫と蕎麦粉製粉施設を所有し、日本全国に販売。「最果て食堂」を知床にオープン予定。
<https://ueharafarm1915.co.jp/>

周りには気の触れた亡霊が毎日フラフラさまよっているかのように映っただろう。

いま思えば良い体験をしたと思う。人の冷たさと温かさの両方を認識できた。

神は人を介して現れる。助かるチャンスは何度もあったはずだ。ただ、先の危機管理ができていなかっただけの顛末である。いくら地域に共済制度がしっかり整備されていなくても、誰も恨めない。自分の生きていく環境は自分で作らないと、今後も生きていけない。組織に属さないで好き勝手に農業を経営するのはとても大変だ。

私の知り合いの農家で正月に電気を止められ、新年をロウソクの

灯火と薪ストーブで迎えた家庭がいる。悔しい気持ちはよくわかる。この現代でここまで冷たくして果たして許されるのか？

そんなあるとき、私に保冷庫の電力停止事件の借りを返すチャンスが訪れた。私は、組織に離農を迫られて辞めたその知り合いの農家の農地を購入していた。奴らは、その農地の電柱敷地料金の支払い契約をしたいととてもスマートに私の家の中に乗り込んできたのだ。

私の答えは、「電気を切った担当とその上司に土下座してもらわないと、契約できない」と申し上げた。先方はそれはできねー！と返してきたので、敷地

の電柱を撤去するよう命じた。ならば重機を畑に入れて抜くと言うので、手で抜けと言ってやった。ロウソクの灯火で悔しく辛い思いで新年を迎え、電力が戻らないまま、会社が倒産してしまった。知り合いの恨みを晴らしてやった。ここまでやっても奴らはなんとも思わないし、誰も損しない。いつか奴らに土下座させてやりたい。経済は感情で動く。

あのとき、助けていただいた方たちにこの場を借りてお礼を述べたい。「本当にありがとう」。この借りは生き抜いて返す。



春耕の途中、トラクターから降りて夕日を眺める筆者。